

第4章 活動の柱と取り組み



目標 1 ひとつづくり

活動の柱 1 見つける

□ 現状と課題

少子高齢化や核家族化、地域社会のつながりや地域に対する関心の希薄化から、隣近所との付き合いや助け合いが薄れつつあります。また、ひとり親や障がい者、介護者家族などの中には、地域で偏見や疎外感を感じている人もいます。そのため、困りごとが言い出しやすく、受け止めてもらえたと感じられる風土づくりが必要です。

隣近所との付き合いや地域活動に関する意識は地域によって差がありますが、多様な価値観を認め合い、障がいの有無に関係なく気軽に出会い、理解し合いながら地域福祉活動やボランティア活動の参加につながる人材発掘と育成が求められています。

取り組み1 福祉への理解を広めて新たな人材を発掘する



多種多様な人々への理解者・協力者を増やすために、主に地域住民を対象にした講座や住民懇談会を開催します。内容は、障がい当事者の暮らし、意識啓発的なもの、ボランティア体験的なもの、地域のニーズや課題に対しできることを考える講座などを地区社協や公民館の事業と共に企画し、開催します。また、必要に応じてオンライン開催も取り入れます。講座や懇談会終了後は、活動につながるようコーディネートします。

● ねらい

地域福祉活動やボランティア活動に参加することで地域への愛着の醸成とともに、多種多様な人々への理解者・協力者を増やします

● 市社協と共に関わる人

当事者団体、地区社協、公民館

● 5年後の目標

地域で暮らす様々な人に対して、寛容な心で接する人が増える環境を整えます

● 評価指標

潜在的な理解者・協力者を見つけ、活動につなげた事例

取り組み2 趣味、特技を活かした人材を発掘する



当事者団体や地区などの多様なニーズに対応するため、自主グループや部活、クラブ・サークルなどへボランティア募集を行い、趣味や特技がボランティア活動につながることを広めます。また、新たな人材を発掘し、活動につなげます。

- **ねらい**
趣味や特技を活かした新たな人材を発掘し、活動につなげます
- **市社協と共に関わる人**
当事者団体、地区社協、公民館、学校
- **5年後の目標**
趣味や特技のグループにもボランティア活動を広め、気軽に地域福祉活動に参加できる環境を整えます
- **評価指標**
発掘した人数



研修会テーマ「顔の見える関係づくり」の活動発表(安居地区社協)



目標1 ひとつづくり

活動の柱2 育てる

□ 現状と課題

「共に生きる力」を育む福祉教育は、1977(昭和52)年から小中学生を中心に推進しています。自分たちが暮らす地域の中で、学校・地域・家庭が連携し、多種多様な人と関わら合う機会が求められています。

また、子どもの学びを通して、保護者や地域の大人の意識が高まることが期待されます。そして、中学校では、近年、キャリア教育^(注4)の一環で、企業や地域とつながりながら職場体験活動や地域活動への参加などを行っています。

地区では、地域福祉活動に関わる人が高齢化し、人材不足が課題となっています。また、福祉委員については、活動が見えにくく、役割を理解してもらいにくい面があります。福祉委員自身のみならず、自治会長や地域の核となる人にも、見守り・支え合い活動を理解してもらうことが必要です。

(注4) キャリア教育

一人ひとりが社会人・職業人として自立するために、様々な大人と、様々な場面でふれあい、必要な能力や態度、学びの意欲を育てるための教育活動です。

取り組み3 地域を基盤とした福祉教育で

小・中学生の心を育む



学校や地域、家庭、ゲスト講師などと連携して福祉教育を推進し、「共に生きる力」を育みます。また、交流の機会や「子ども福祉委員」の任命などのプログラムを展開します。内容に合わせ、中学生にも対象を拡大する他、オンラインの開催や動画も取り入れます。

● ねらい

福祉への理解を図るため、年齢に応じて継続的に、地域での人との出会いや関わら合う機会をつくります

● 市社協と共に関わる人

地区社協、当事者団体、学校、PTA

● 5年後の目標

地域を基盤とした福祉教育を地区社協やゲスト講師、学校などと協力して、交流の機会や子ども福祉委員^(注5)の任命などを市内各地で展開します

● 評価指標

学びを通して子どもが実践した福祉活動の事例

(注5) 子ども福祉委員

地域の高齢者などとのつながりや生き方を学ぶとともに地域の大人へ地域福祉活動を認識してもらうための活動。福井市内では、2019(令和元)年に初めて任命しました。

取り組み4 地域の見守り、支え合いへの理解と共感を育む



地域全体に見守りや支え合い活動の重要性を広め、住民の理解と共感を育みます。また、福祉委員の役割と活動を紹介した事例や高齢者などから福祉委員へのありがとうメッセージを募り広報しながら、自治会長などの理解と共感を促進します。

●ねらい

地域全体に見守りや支え合い活動の重要性を広めながら理解と共感を育み、福祉委員活動への理解者・協力者を増やします

●市社協と共に関わる人

地区社協、市自治連、民生委員児童委員

●5年後の目標

見守り・支え合い活動を我が事として実感できる環境を整え、継続的に理解者・協力者が増える基盤をつくります

●評価指標

地区社協全体を対象とした研修の回数



子ども福祉委員と地区社協との交流会(鶉地区、宮ノ下地区)



心を育むための子ども福祉委員活動ノート



目標 1 ひとづくり

活動の柱 3 活かす

□ 現状と課題

第3次活動計画では、若い世代のボランティア参加を促進するために高校生などのボランティア体験の場をつくり、5年間で延べ170名を超える高校生などがボランティア体験に参加しました。さらに、近年、大学入試の際に、ボランティア活動や課外活動などが評価されることもあり、高校生などのボランティア活動の機運が高まっています。

2016(平成28)年の社会福祉法の一部改正により、社会福祉法人による「地域における公益的な取組」の推進が位置づけられました。SDGsが社会に広がり、企業の社会貢献活動にも関心が高まっています。さまざまな取り組みを行っている企業もあり、他企業や他法人の具体的な取り組み内容や地域側のニーズに関する情報を広めていく必要があります。

取り組み5 高校生・大学生が気軽に関われる 地域福祉活動を広める



高校生などに対して、地域福祉活動の楽しさややりがいを伝える中で、参加へのハードルを下げ、気軽に関われる地域福祉活動を広めます。また、ボランティア情報紙などで高校生の目線で記事を書く特派員を設けたり、継続して活動したいと思えるプログラムを活動先と一緒に企画したり、高校生などの豊かな発想で新たな地域福祉活動を展開します。

●ねらい

若者が持つ力を地域福祉活動につなげるための機会を増やし、充実した活動にするための意識啓発を図ります

●市社協と共に関わる人

地区社協、ボランティアグループ

●5年後の目標

高校生や大学生の発想による新たな地域福祉活動を展開します

●評価指標

高校生や大学生が参画した事例
(地域福祉活動、特派員活動など)



福祉の視点でまちを見つめる
「バリアフリーチェック」

取り組み6 SDGsを踏まえた企業・社会福祉法人等の 社会貢献活動を広める



企業や社会福祉法人などに向けて、社会貢献活動に関する学びの場を設けます。また、企業や社会福祉法人などの応援を必要とする地域や団体のニーズも踏まえ、双方の希望に応じた、つながりを支援します。

●ねらい

企業や社会福祉法人なども地域の一員として、地域の中で求められる活動やできることがあることに気づき、社会の中で力を発揮できるように応援します

●市社協と共に関わる人

企業、社会福祉法人、地域の団体

●5年後の目標

SDGsと社会貢献を啓発しながら、企業、社会福祉法人などが地域と一緒に活動できる環境をつくります

●評価指標

企業、社会福祉法人などと地域のマッチング事例



「実践につながる社会貢献セミナー(SDGs編)」での情報交換



目標 2 つながりづくり

活動の柱 1

出会う

□ 現状と課題

地域にはさまざまな困りごとを抱えた方が暮らしており、支援する当事者団体も存在しますが、横のつながりが薄く、出会う機会があまりありません。悩みを共有したり、情報交換することで、孤立感を解消したり、新たな出会いにつながります。

また、障がい者の職場や学校など以外の居場所となるサークルやグループ活動の場が求められる一方、特に文化・芸術活動の分野については広がり十分ではない面があり、新たな活動の選択肢となるよう、情報発信する必要があります。

取り組み7 いろいろな立場の人たちとの 情報交換・交流を深める



ボランティア団体、障がい当事者団体、介護者家族の会、子育てサークルなど、いろいろな立場の個人や団体の交流会を開催します。より幅広い層の方が参加できるように、オンライン開催も取り入れます。交流会の開催後は、参加によって得られた新しいアイデアやつながりがより発展するよう、継続的に支援します。

● ねらい

当事者の新たなつながりを創出し、孤立感を解消します

● 市社協と共に関わる人

当事者団体、NPO団体、ボランティア団体、子育て中の人

● 5年後の目標

交流会での出会いが、それぞれの普段の活動に新しいアイデアをもたらす好循環をつくれます

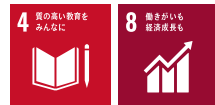
● 評価指標

新たなつながりや取り組みの事例



「みんなとみんなの交流会」での情報交換

取り組み8 障がい者等の文化・芸術活動の参加と 広がりの場をつくる



既存の文化・芸術活動の成果を発表する機会の把握と、障がい者やその家族、関係者などに活動への共通理解をもつための学習会を開催し、活動への参加の選択肢を増やします。

●ねらい

新たな居場所や仲間づくりにつながる文化・芸術活動の場を創出します

●市社協と共に関わる人

当事者、企業、NPO団体、ボランティア団体、社会福祉法人

●5年後の目標

本人の参加をはじめ、家族、関係者なども文化・芸術活動の楽しさに気づき、参加を広げ、後押しする仲間を増やします

●評価指標

障がい者などが文化・芸術活動を通して豊かな生き方につながった事例



障がい者などの文化芸術活動の一例
「みんなで舞台に立とうシーズン15アゲイン」



目標 2 つながりづくり

活動の柱 2 ふれあう

□ 現状と課題

家族構成の変化や地域のつながりの希薄化により、世代の違う住民同士が出会う機会が減少しており、こうした機会を持つことでのふれあいや学び合いの機会が求められています。

また、現在、気軽に立ち寄れる場としてふらっとベル(注6)を開催していますが、より身近な相談の窓口やボランティア団体などの活動の場としての機能を付与することで、幅広いつながりのきっかけとなることが求められています。

(注6) ふらっとベル

ショッピングシティ・ベルで、誰もが気軽に立ち寄れるサロンを開催しています。2021(令和3)年現在、4つの社会福祉法人と1つの一般社団法人、ボランティアに協力をお願いしています。

取り組み9

世代をこえた出会い、ふれあい、 学び合いの機会をつくる



高校生が高齢者に情報機器の操作を教える講座や、中高生と地区住民が一緒になって地区のことを考えるワークショップを開催し、世代をこえてつながる機会を創出します。

●ねらい

様々な価値観や知識を持つ異なる世代が出会うことで、それぞれの持ち味を生かした学び合い、気づき合いの機会を設けます

●市社協と共に関わる人

地区社協、学校、企業、団体、社会福祉法人

●5年後の目標

新たな情報機器の活用など、時代の流れに応じたふれあいや学び合いの機会を臨機応変に提供できる体制をつくります

●評価指標

地区でのつながりのことを考えるワークショップや、世代をこえて学び合う取り組みの開催(年1回以上)



「地域について考える中高校生の
ワークショップ」での議論

取り組み10 誰でもいつでも集える場での ふれあいを広げる



現在開催しているふらっとベルを継続しつつ、協団法人の拡大やボランティア団体などへ活動場所として提供することで、新しいふれあいの機会を創出します。また、地域の困りごとを把握するアウトリーチ^(注7)の手段として、相談機能の強化を図ります。

●ねらい

気軽に立ち寄れる場としてふらっとベルを継続しながら、身近な相談窓口や活動の場として機能を強化します

●市社協と共に関わる人

社会福祉法人、ボランティア団体

●5年後の目標

ふらっとベルの活動が新しいアウトリーチ^(注7)の方法として、さまざまな方に利用されるよう機能を高めます

●評価指標

ふらっとベルの活用事例

(注7) アウトリーチ

支援が必要であるにもかかわらず、声をあげることが難しい人に対し、さまざまな支援者などが積極的に働きかけ、必要な情報や支援を届ける方法のことを言います。



「オープンサロン ふらっとベル」での談笑の様子



目標 2 つながりづくり

活動の柱 3 響きあう

□ 現状と課題

第3次活動計画では、地域福祉活動発表会^(注8)を開催し、地域福祉活動を行う団体が対外的に活動を発表する場づくりに取り組みました。こうした取り組みを継続・発展させ、さらに新しいつながりを生み出したり活動を活性化させるヒントを得る機会が必要です。

また、市内の多くの地区では、地域福祉に関わる人が高齢化し、若い人材が不足し、世代交代がスムーズに進んでいません。これは継続的な課題でもあり、若い世代の参加を進め、地域福祉に対する関心を高める取り組みを途切れることなく行っていく必要があります。

(注8) 地域福祉活動発表会

地域福祉活動を行うさまざまな団体が集い、それぞれの実践について発表を行う会です。対外的に活動を発表する機会を設けることで、広く活動者や住民の地域福祉活動への理解、関心を高めることを目的としています。

取り組み11

新たなアイデアを共有する 地域福祉活動の発表の場を開く



地域福祉活動を行う団体が対外的に活動を発表する発表会、交流会を開催し、新しいつながりをつくっていきます。さらに地区レベルでの開催や、オンラインの活用、交流会的な要素を導入するなどして発展させます。

●ねらい

住民に対する地域福祉活動の理解を進め、地域福祉団体の活動を強化します

●市社協と共に関わる人

地域団体、企業、社会福祉法人、ボランティア団体、NPO団体

●5年後の目標

発表会で新しいアイデアを共有し、それぞれの活動先で活力を生む好循環をつくります

●評価指標

活動発表会をきっかけにして、取り組みがより活性化した事例

取り組み12

地域福祉活動に参加する 30～50歳代の活動者を増やす



実際に地域福祉活動に取り組む同世代の人から、楽しさ、やりがい、活動を継続するコツを学ぶ機会をつくります。

● ねらい

30～50歳代の住民が活動に参加するきっかけや秘訣、楽しさややりがいを知る機会をつくり、次世代の地域福祉活動の担い手を発掘・育成します

● 市社協と共に関わる人

地区社協、企業、ボランティア団体、NPO団体、住民、福祉委員、民生委員児童委員

● 5年後の目標

自分も活動に参加してみようと思える30～50歳代を増やす方法を見出し、各地区で啓発します

● 評価指標

地域福祉活動の楽しさ、やりがい、活動を継続するコツを学ぶ機会の回数(年1回以上)



「地域福祉活動発表会」での事例発表



目標 3 まちづくり

活動の柱 1 広める

□ 現状と課題

新型コロナウイルス感染症の影響が長期化し、これまで地域で取り組んできた「つながりづくり」や「居場所づくり」がもちにくい状況が続きました。

この状況に対応する手段として、ICT(注9)やソーシャルメディア(注10)を用いた取り組みが改めて注目されましたが、それらに不慣れな人は、情報格差だけでなく、つながる機会にも格差が生まれています。これらの格差を解消するために、ICTの活用をサポートする取り組みが求められています。

また、感染拡大のリスクを恐れ、地域福祉活動でのつながりに影響が生じましたが、つながりを絶やさないための創意工夫を凝らし、感染拡大防止で得られた教訓を活かす新たな地域福祉活動の展開が求められています。

取り組み13

ICTを活用してあらゆる世代に 福祉の情報を広める



ICTを活用した情報の取り方や選び方をサポートするための取り組みを行い、地区社協や高齢者、障がい当事者に対して情報発信を行います。誰もが気軽に必要な情報にアクセスできるように支援します。

● ねらい

ICTの活用をサポートして情報格差を解消します

● 市社協と共に関わる人

地区社協、高齢者、障がい当事者、社会福祉法人、専門知識をもつ関係者

● 5年後の目標

情報発信の選択肢を増やし、誰もが気軽に情報にアクセスできる環境を整えます

● 評価指標

ICTを活用した情報発信の実践事例の開発(年1回以上)

(注9) ICT

「Information and Communication Technology」の略で、通信技術を活用したコミュニケーションを意味し、インターネットなどを経由して人と人をつなぐ役割を果たす。

(注10) ソーシャルメディア

インターネットを利用して誰でも手軽に情報を発信し、双方向のやりとりができるメディアである。代表的なものとして、YouTubeやLINEなどのサービスがある。

取り組み14

コロナ下でも安心してつながれる ノウハウを広める



コロナ下で生み出された新たなつながりのノウハウ(対面、オンラインなど)を広めるための講座や相談会を開催し、多様な人たちが出会い、つながり、交流がもてるよう情報発信していきます。


- **ねらい**
多様な人たちの活動支援と活性化
- **市社協と共に関わる人**
地区社協、子育て中の人、障がい当事者、NPO団体、ボランティア団体
- **5年後の目標**
リスクマネジメント^(注11)の知識を共有しながら、コロナ下で得たノウハウを広め、新たなつながりを生み出します
- **評価指標**
新たなつながり方の選択肢を活かした実践事例の広報(年1回以上)

(注11) リスクマネジメント

リスクマネジメントとは、発生しうるあらゆる危険により被る損害を回避または軽減することをいい、それが起きないように、または被害を最小限にすることである。



地区社協を対象とした「オンラインツールZoomの
使い方を学ぶ研修会」



目標 3 まちづくり
活動の柱 2 支える

□ 現状と課題

福井市内には、自治会ごとに福祉委員が設置されていますが、その活動の実情は、福祉委員と活動を支える人たちの意識の違いや役割の理解によって差が生じています。より一層の意識啓発も含めて活動の基盤強化をしていく必要があります。

また、近年大きな被害を伴う災害が多発しています。災害に強いまちをつくるためには、普段から住民同士が声をかけあい、いざというときに助け合える地域づくりが重要です。

取り組み15 福祉委員の想いを新たな見守り・
支え合い活動につなげる



すべての福祉委員に対して見守り活動に関する調査を行い、結果を共有して研修内容に反映するなど、今後の福祉委員活動の基盤強化に役立てます。調査はオンライン入力フォームを活用して実施します。また、福祉委員になって良かったと思える事例や高齢者などから福祉委員へのありがとうメッセージを募り、広報します。

● ねらい

福祉委員活動の基盤強化と地域の見守りや支え合いの質向上

● 市社協と共に関わる人

地区社協、福祉委員

● 5年後の目標

福祉委員の想いや声を形にして、活動のやりがいと見守り・支え合い活動の大切さを広めます

● 評価指標

福祉委員の活動事例の広報(年1回)



「おうちでもデイホームセット」を持って
高齢者宅を訪問

取り組み16

ふだんの見守り・支え合いと防災が 一体の活動モデルをつくる



災害時の対応がスムーズに行えるよう、地域防災関係者と地域福祉関係者が連携し、地域福祉と防災のノウハウをもった地域のリーダーを育てると共に、地域全体の防災力の底上げが必要です。そのために、講座や懇談会を開催します。

●ねらい

地域福祉と防災のノウハウをもった地域のリーダーを増やす

●市社協と共に関わる人

地域防災関係者、障がい当事者、支援者、地区社協

●5年後の目標

地域福祉と防災のノウハウをもった地域のリーダーを育て、普段の見守り活動がいざというときの災害対応につながることを広めます

●評価指標

防災の観点を取り入れた見守り・支え合いについて学び、実践につなげた事例



「地域防災を考える講座」でのワークショップ



目標 3 まちづくり

活動の柱 3 高める

□ 現状と課題

孤立や虐待、貧困など多様な福祉課題の解決には、サービスや制度だけではなく、他者に助けを求め、快くサポートを自らが受け止める〈受援力〉(注12)を高めることが重要になっています。さらに、近年の新型コロナウイルス感染拡大の影響により、福祉課題が複雑化しています。

しかし多くの地域では、助けてと言える、SOSの出しやすい環境には至っていません。住民参加の推進で助けあいのまちづくりを進めるためには、各関係機関、団体などとネットワークづくりを推進し、地域で助け上手と助けられ上手を作る仕掛けをしていく必要があります。

(注12) 受援力 (じゅえんりょく)

困った時に助けを求め、支援を受け入れる力のこと。2011(平成23)年に起きた東日本大震災をきっかけに広く知られるようになり、これから生きていく人たちにとっては必要不可欠な力である。

取り組み17

住民参加を高めるための コーディネーションの手法を広める



地域福祉活動に関わる人や団体が、お互いの立場を理解した上で、つながり合いや支え合いの質を高めていくコーディネーションの手法を学ぶ研修を行います。住民の立場で、ちょっとした困りごとの受け止めや橋渡し、仲間づくりができるように支援します。

● ねらい

コーディネーション(注13)の手法を学び、地域での福祉活動で相談や調整などに活かしていきます

● 市社協と共に関わる人

地区社協、企業、団体

● 5年後の目標

ちょっとした困りごとの受け止めや橋渡しができる住民を増やします

● 評価指標

コーディネーションの手法を学ぶ研修会の開催(年1回以上)

(注13) コーディネーション

立場や状況が異なる人々や組織の間に新たなつながりを作り、対等性を考慮しながら調和・調整すること。特に地域福祉活動の場合、どちらか一方の都合や条件・考えを押しつけるのではなく、当事者双方の自己決定権を尊重したうえでつなげていくことが大事である。

取り組み18

福祉サービス事業所と住民が 地域福祉でできることを考える



福祉サービス事業所と地域のキーパーソンが顔の見える関係をつくるために、それぞれのニーズに応じた情報交換の機会をもちます。同じ地域の一員として地域の課題を共有し、できることを一緒に考えます。

● ねらい

福祉サービス事業所と地域のキーパーソンが顔の見える関係をつくり、地域課題を共有し、できることを考えます

● 市社協と共に関わる人

地区社協、福祉サービス事業所

● 5年後の目標

福祉サービス事業所と地域との連携を定番化し、地域での福祉活動に新しい風を吹き込みます

● 評価指標

福祉サービス事業所が地域づくりに参画した事例



「住民参加を高めるためのコーディネーション研修」



「地区障がい福祉サービス情報交換」(社北地区)